

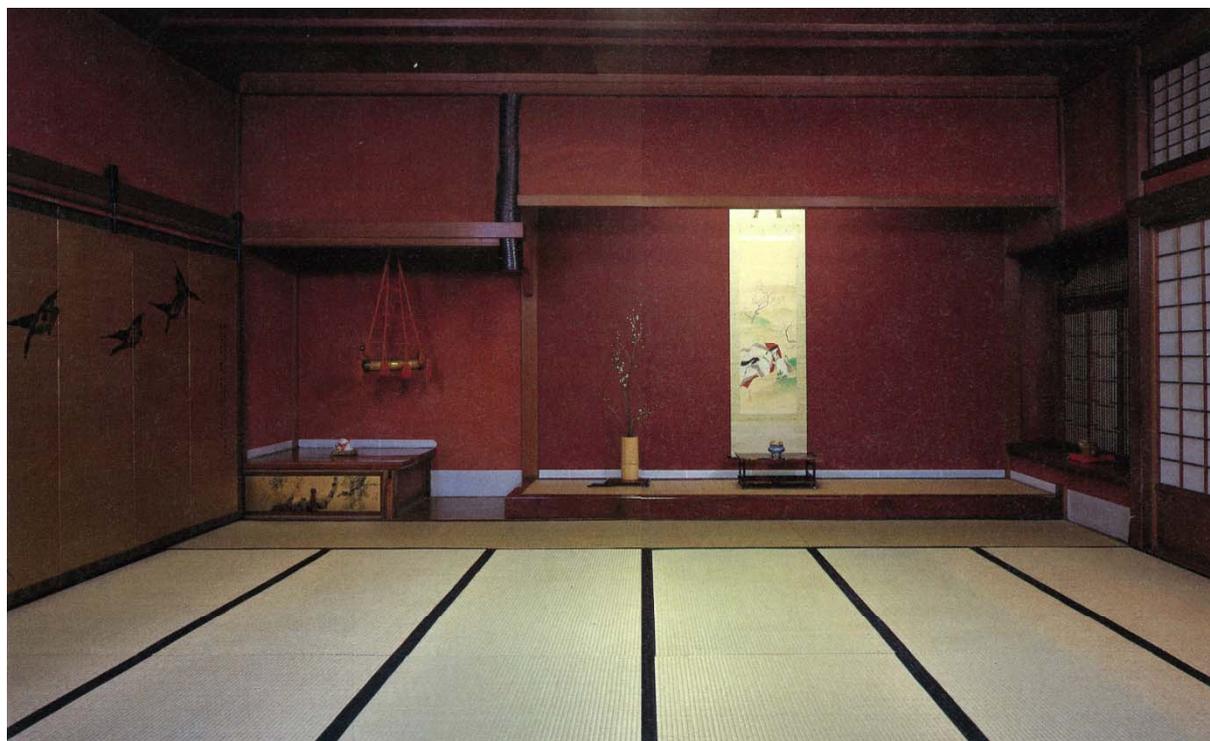
雪国そだちの

# 小松畳表

## 知的資産経営報告書

～小松畳表の伝統を受け継ぐ～

平成二十四年十二月



# INDEX

1. 知的資産経営報告書の作成目的	1
2. 当社の概要と小松畳表の概要	2
3. セグメント分析と当社の提供価値	4
4. 当社が提供する価値とそれを支える知的資産	7
5. これからの挑戦	9
6. 代表者からのメッセージ	9
7. 作成支援士業コメント	10
8. 知的資産経営報告書とは	11

## 1. 知的資産経営報告書の作成目的

小松畳表は「北限のイグサ」を使った畳表として、古くから最高級品の畳表として知られています。特に、日本の西南部で産出されるイグサと違い、苗が幼いまま厳しい冬を迎え、白く冷たい雪に覆われたまま春を迎えなくてはなりません。その自然の境遇により、小松畳表の特徴である丈夫で美しい光沢が生まれています。しかし、イグサの栽培は稲作と比べると多くの費用多くの手間を要すること、また、廉価な中国産の畳表により、イグサを栽培する農家が減少している状況であります。具体的には、小松イグサの栽培農家は最盛期(昭和30年)には1395戸、昭和59年には97戸、平成13年には18戸、平成23年には「当社を含めわずか1~2戸」となり、作付面積も最盛期の300haから0.6haへと大幅に減少している状況であります。

本報告書では、小松イグサそのものそしてそれを用いた畳表の良さをもっと全国の方に知ってもらいたい。小松畳表の良さを全国の方に知ってもらい、お客様に使ってもらうことで再び小松イグサを栽培する農家が増え、小松イグサの産業が当地に根付くことを目的としております。



## 2. 当社の概要と小松畳表の概要

### ■ 経営理念

手間暇かけて作ったイグサとそれを用いた「小松畳表」。これを使ってくれる人、使って喜んでくれる人のために、小松畳表の伝統を守り続ける。

### ■ 当社の特長

● **本格的に小松畳表の生産に取り組む唯一の生産者**  
イグサは、稲作の何倍もの手間やコストを要します。また、稲作で用いる設備の転用ができず(できるのはトラクター程度)、稲作と比べ機械化が進んでません。さらに、小松イグサは日本の西南部で産出されるイグサと違い、苗の状態ですぐに覆われたまま春を待たなくてはなりません。小松イグサは他産地にはない良い特徴(丈夫で美しい光沢をもつ等)を持つものの、その生産は大変なものであります。

国産畳表そのものが廉価な中国産にとって代わられており、日本全体でもイグサ農家及び畳表の生産者の存続が危ぶまれています。当社は、1000年以上続くこの小松畳表の伝統を守り続けるため、**本格的に小松畳表の生産に取り組む唯一の生産者**として、鋭意生産に取り組んでいます。

### ■ 企業概要

【代表者】 宮本 隆史  
【住所】 石川県小松市白江町夕413番地  
【業種】 小松畳表生産・農業  
【従業員数】 4名  
【URL】 <http://www7.ocn.ne.jp/~komatsu>

### ■ 沿革

明治後期 初代 宮本七次郎が農業を始める  
2代目 宮本克己  
3代目 宮本達夫(昭和42年ごろの写真)

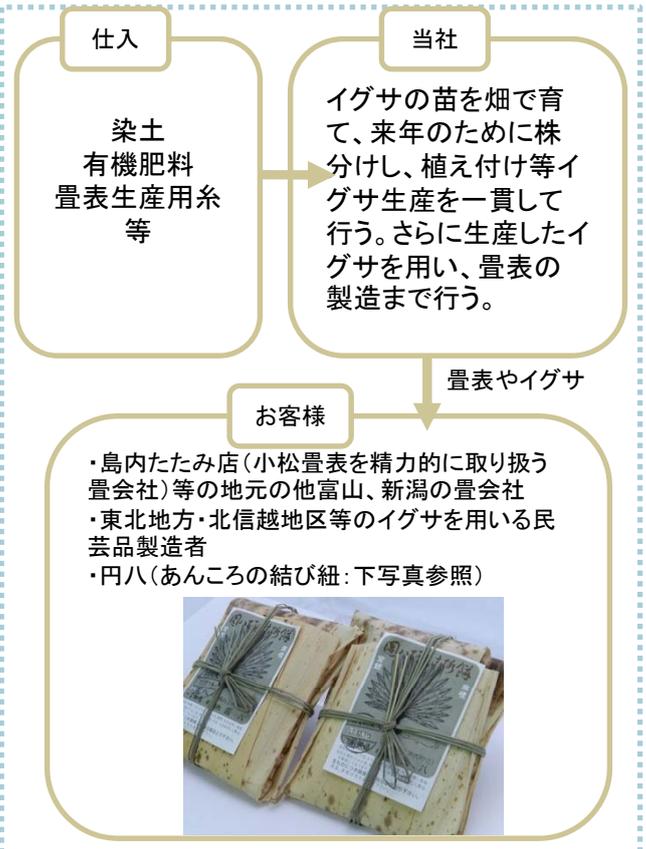


4代目 宮本隆史(当代)

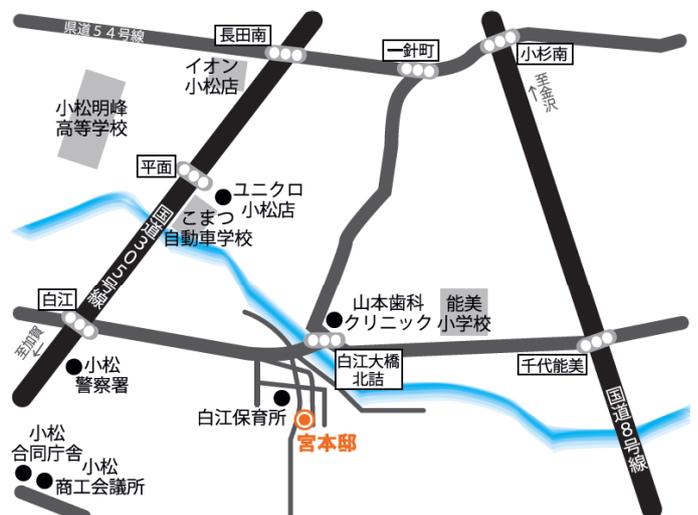
### ■ 連絡先

TEL・FAX : 0761-22-4696  
担当者 : 宮本隆史

### ■ 当社のビジネスモデル



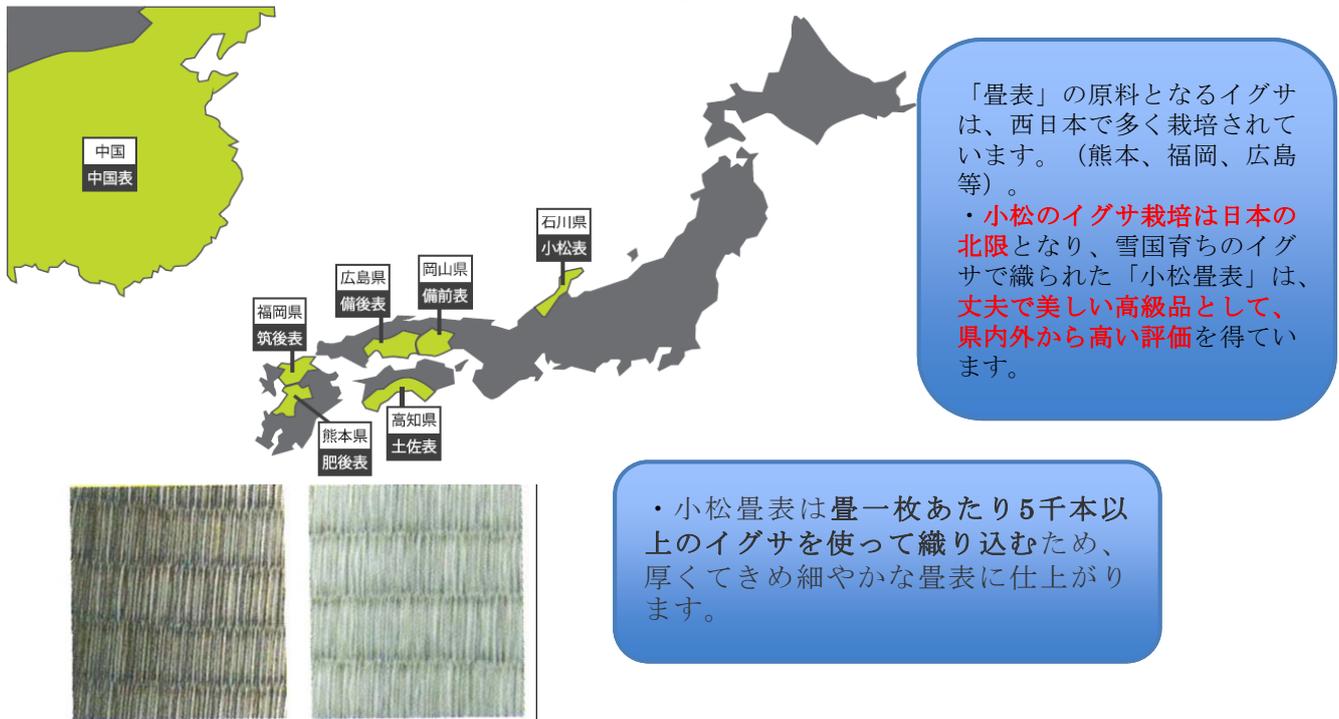
### ■ アクセス



## ■ 北限のイグサ産地「小松イグサ」それを用いた小松畳表の概要と歴史

イグサの主要産地は西日本であります。小松はイグサ栽培の北限に位置し、雪国のイグサとして独特の存在感を放っています。通常イグサは2毛作で作られますが、小松はイグサの茎が硬く成長するのをじっくりと待ち、真夏に一度だけ刈り取ります。このため、小松イグサは、他産地に比べ、表皮が硬く、輝きがあり、摩耗しにくい畳表になる特徴があります。

さらに、小松畳表は畳1枚当たり5千本以上(普及品は4.5千本)のイグサを使って織り込むため、厚くてきめ細やかな畳表に仕上がります。昔ながらの天然泥染めを行っていることも特長であります。



「畳表」の原料となるイグサは、西日本で多く栽培されています。(熊本、福岡、広島等)。

・小松のイグサ栽培は日本の北限となり、雪国育ちのイグサで織られた「小松畳表」は、丈夫で美しい高級品として、県内外から高い評価を得ています。

・小松畳表は畳一枚あたり5千本以上のイグサを使って織り込むため、厚くてきめ細やかな畳表に仕上がります。

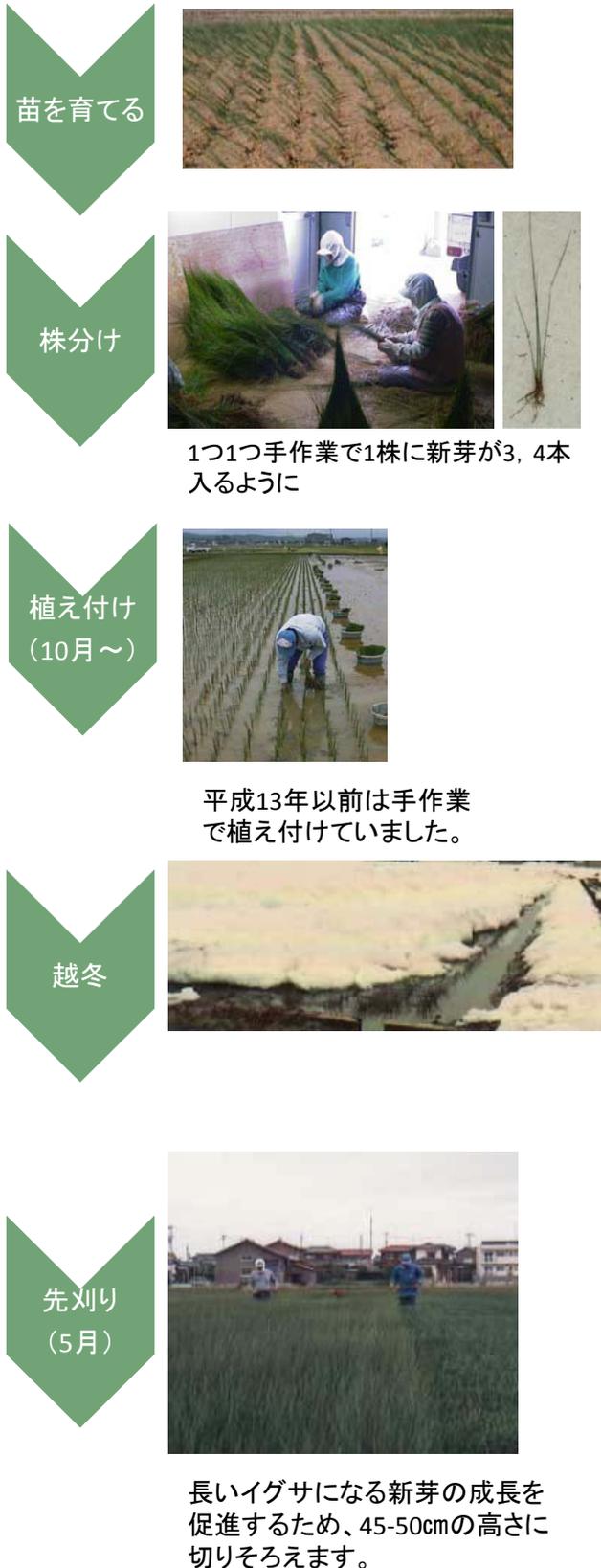
図 左 中国イグサ産の畳 右 小松イグサの畳

### 小松畳表の歴史

- 986年頃(寛和年間) 釜谷清右衛門が小松市大野町地内で天然イグサを発見し、吉竹町に移植。
- 1601年(慶長6年) 小松市沖町、不動島町、打越町、若杉町、八幡町で畳表を税金として加賀藩に収める。
- 1639年(寛永15年) 前田利常、小松城を築城。地場産業振興策として、イグサの栽培を奨励。小松畳表を特産物として、幕府に献上。
- 江戸後期～明治 北前船が、北海道へ小松畳表を運ぶ。
- 1892年(明治10年) 第一回国内博覧会に小松畳表を出品全国的な名声を得る。
- 1955年(昭和30年) 小松畳表の最盛期(300ヘクタールの作地面積、1395戸の栽培農家)
- 1963年(昭和38年) 戦後最大級豪雪(38豪雪)の影響により、畳表の生産量が前年比50%となる。これを機会に繊維業へ転職するものが多くなり作付面積の減少に拍車がかかる。(当時は159ヘクタール)
- 1967年(昭和42年) 高度経済成長による建築ラッシュにより、畳表全体が「青いダイヤ」と呼ばれるようになり、この影響で、生産は一旦回復向かう。
- 1984年(昭和59年) 栽培農家が100戸を切り、97戸となる。
- 1990年(平成2年) JA小松で全国に先駆け、共同泥染め乾燥施設を整備。
- 2001年(平成13年) 栽培農家が18戸、作付面積が11ヘクタールとなる。  
このころ、従来手作業で行っていたイグサの株分け、田植えを4件の農家が共同で「みのる式のポット移植機」(次ページ右図)を導入し機械化に成功する。
- 2006年(平成18年) 共同泥染め乾燥施設が老朽化により閉鎖となる。
- 2012年(平成24年) 栽培農家が1-2戸、作付面積が0.6ヘクタールとなる。

### 3. 小松畳表の生産工程とそこから生み出される小松畳表の価値

#### 小松畳表の工程



#### 他産地と差別化につながっている取組



平成13年より機械植え「みのる式ポット苗移植機」にて手作業を機械化に成功しました。(構造資産)

小松イグサは唯一雪の下で育つイグサです。そのため他産地にはない、硬いイグサに成長します。根腐れ・雪腐れを防ぐために排水路を整備し、適切な排水を行っています。(構造資産)。雪の下では、雪の重みに耐え且つ寒さに耐えられる、ちょうどよい株の大きさにする必要があります(構造資産:適度な株の大きさにするノウハウ)。

### 3. 小松畳表の生産工程とそこから生み出される小松畳表の価値

#### 小松畳表の工程

網掛け  
6月



梅雨の雨でイグサは伸びるので育成の応じて網の高さを上げます(大凡4回高さを変えます)。

施肥  
6月

イグサは、稲の大凡5倍の肥料が必要です。



刈取り  
7月

泥染



乾燥

刈取りと同時に泥染め・乾燥まで一気に仕上げる必要があります。乾燥が終わったら倉庫に保管されます。

完成



土づくり

小松イグサは、他産地のように2毛作はしません。稲作が終わった田んぼで稲わらを全量すきこみ、土づくりに力を入れます。

#### 他産地と差別化につながっている取組

当社は、有機肥料(魚粕・油粕・米ぬか・しきしま肥料)と低度化成肥料を用い、一度に多く施肥せず、少しずつ分肥します。この理由は硫安や尿素等の高度化成肥料を使うと黒スジが出やすくなること、少しずつ分肥すると粒ぞろいの良い充実したイグサができるためです(構造資産)。

温暖な土地では「早刈り」といって梅雨時期(6月)から収穫に入ります。小松イグサは早刈りせず、十分に成長させた状態で収穫します。(構造資産)

当社は、昔ながらの天然泥染めにこだわっています。小松イグサに合う染土を供給いただいているからこそこのこだわりを実現できています(関係資産:資材供給元)。

温暖な地方では、稲刈りが終わった田んぼですぐにイグサ栽培を行います(2毛作)が、当社では、イグサの連作をせず、稲刈りが終わった田んぼを1年かけて土を作っています。

### 3. 小松畳表の生産工程とそこから生み出される小松畳表の価値

#### 小松畳表の工程

選別

10月～3月

イグサを織機にかける前にイグサの選別を行います。

加湿

10月～3月

小松イグサは、硬く丈夫なため、そのまま織機にかけず、加湿してやわらかい状態で織ります（寒の水で加湿し製織した寒表はカビがこないといわれています。）

製織

10月～3月



最近では、周辺に畳織機を修繕できる業者がいなくなり、代表自らが保守を行っております。

完成



販売

当社は、生産した畳表の大半を小松畳表のブランディングに取り組む島内たたみ店、島内たたみ店等の地元の他富山、新潟の畳会社に販売しています。

これだけの手間暇をかけて製造している小松畳表の価値を認めている仲間（島内たたみ店の島内氏と生活アート工房の南出氏）と小松畳表のブランディングに取り組んでいます（関係資産）。

#### 他産地と差別化につながっている取組

通常4,500本のところ、小松畳表は1枚当たり、5,000本以上織りこみます。イグサ自身も硬く、そして織密度も高い畳表こそ、小松畳表の特長です。このため、小松の畳表は畳表を裏返して再生利用もできます。



7年目のうら返し

## 4. 当社が提供する価値とそれを支える知的資産

### ■ 当社の知的資産

知的資産とは、「従来のバランスシート上に記載されている資産以外の無形の資産であり、企業における競争力の源泉であります、人材、技術、技能、知的財産（特許・ブランド等）、組織力、経営理念、顧客とのネットワーク等、財務諸表には表れてこない目に見えにくい経営資源の総称」（独立行政法人中小企業基盤整備機構）を指します。

企業は自社の知的資産を連鎖的に活用して価値を創り、それを顧客に提供して利益を上げています。それゆえ、知的資産は価値創造のストーリーを形成する要素ともいうことができます。

ここでは、知的資産を

1. 人的資産（属人的であり、従業員が退職時に一緒に持ち出す資産）
2. 構造資産（従業員が退職しても企業内に残り、組織に組み込まれた資産）
3. 関係資産（企業の対外的関係に付随したすべての資産）

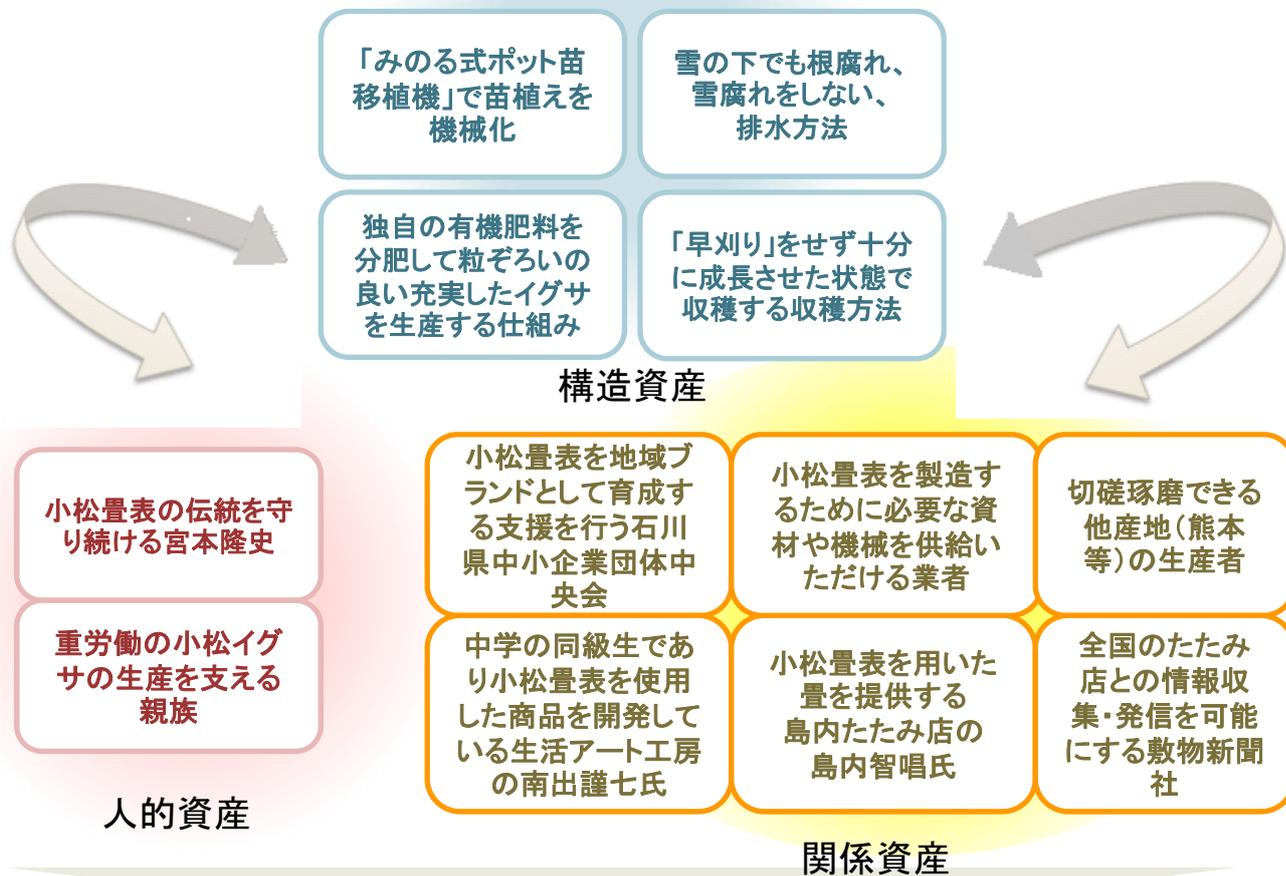
に分類して紹介します。

次ページには、当社が提供している価値とその価値を支える知的資産の関連を表にして示します。

■ 当社の強み(価値)はどのように形成されたの？(過去から現在の価値創造のストーリー)

<p><b>小松の気候に合った天の恵み</b></p> <p>小松イグサは、北限のイグサとして古くから知られています。雪が降る地域で、イグサを栽培するためには、雪が降る前に、イグサを植え付けなくてはなりません。雪の時期を苗の状態で耐えたイグサだからこそ、表皮が硬くしなやかなイグサへと成長します。降雪量が多すぎたり、冬の時期が長すぎたりした場合、苗は冬の寒さに耐えられず、一方で冬が厳しくないとい強くしなやかなイグサに成長しません。イグサの性質と小松の気候どちらが欠けても、北限のイグサは世に出なかつたでしょう。小松イグサはまさに天の恵みといえます。</p>	<p><b>強靱なイグサを使った月日を重ねる毎に味が出る小松畳表</b></p> <p>小松イグサは他産地のイグサと比べ強くしなやかなイグサに成長する作り方になっています(苗で雪の時期を過ごす、有機肥料の分肥、早刈りをしない、連作をしない等)。このイグサを用い1枚当たり5,000本以上(通常は4,500本)を織り込んで小松畳表を作っています。これは、小松畳表を用いた畳は、使えば使うほど味わいがまし、長い年月を重ねてその住まいや建物に溶け込んでいくそんな特長を持つからです。</p>
---	--

■ 当社の強み(価値)はどのような人や仕組みで支えられているの？



**【提供する価値】**

硬くて丈夫で美しい光沢を放つ小松畳表

## 5. これからの挑戦

### ■ 当社は常に進化します。(未来の価値創造のストーリー)

#### 本物のイグサ畳の良さを伝える

世の中には、外国産イグサ畳やビニール製畳、紙製畳などいろいろな畳がありますが、国産の畳表の良さを伝えていきます。特にその中でも小松イグサを用いた畳表の特長(丈夫であることから、表面が擦り切れても畳表を裏返して使用できる等)が物を大事にする日本人に適していることを伝えていきたいと思ひます。

#### 北限のイグサのブランド化

小松イグサは、日本北限のイグサであり、温暖な地域でできたイグサとは、韌性(強しなやかであること)が異なります。この他にはない特長をさらに活かすべく、地域の畳製造会社、家具製造、石川県中小企業団体中央会とチームを組み小松畳表のブランド化に取り組んでいきたいと思ひます。

#### 作業環境の改善

イグサの栽培・加工は、3k(きつい、汚い、危険)と言われています。稲作と比べ、多くの手間がかかり、機械化されていない作業も多く、重労働です。特に、泥染め以降の工程は、土埃の中での作業となります。この土埃が農家をイグサ栽培から遠ざけている要因となっています。農家がイグサ栽培を頑張ってみようと思える作業環境への改善を目指します。

## 6. ～代表者(宮本隆史)からのメッセージ～



石川県農業短期大学(現石川県立大学)を卒業後、熊本のイグサ農家にて修行する。帰郷後は、父に師事し、イグサ・米等の農業を学ぶ。

JA小松い草青年部長(平成2年～平成10年)、JA小松い草部会長(平成10年～)を務めるなど、稼業だけでなく、小松地区の農業の発展・育成にも積極的に参画している。現在は、小松地区唯一の小松い草生産者として、小松に根付く伝統と文化を次代につなぐ活動を行っている。

生活様式が変わり住宅の造りも変わってきました。しかし、日本の風土や日本人の生活の中で、畳の上でくつろぐことは、心を落ち着かせ、安らぎの時を我々に与えてくれます。私は、北陸の家での安らぎの場である畳の間を小松畳表で演出したいと考えております。

私の息子も、農を継ごうとしており、一段と農に対してやりがいを感じています。これまでの小松イグサに関してははとお互いに切磋琢磨できる仲間がいなかったことが成長のネックとなっておりました。平成24年5月18日にイグサが石川県の地域産業資源に認定されたことをきっかけに、現在、石川県中小企業団体中央会から「農商工連携」による小松イグサを用いた畳を振興するための支援をいただいています。その支援の中で、畳店、家具メーカー、コーディネーター等の勉強を重ねるうちに、小松イグサにもようやく光が差し込み、面白く展開できる可能性が高まったと期待しております。この取組をきっかけに、農家だけでなく、いろいろな方が小松イグサの振興に参画いただき、建設業界をはじめとするいろいろな業界へのアプローチや商品開発を行っていきたくと考えております。この取組みや小松イグサの新たな商品化で小松イグサが復活し、新たな生産仲間ができることを願っております。

## 7. 作成支援士業コメント

### 中小企業診断士 西井克己

小松イグサの生産者は、最盛期には1395戸であったにもかかわらず、現在、当社を残すのみとなっております。これは、イグサ生産が、稲作生産と比べ重労働で且つ多くの工程で未だ機械化されていないことや泥染めからの作業環境の悪さ(土埃の中での作業)が大きな要因と考えられます。また、その中でも小松イグサは、雪の降る前に植え付け、雪が降れば排水に気を配る必要がある等、温暖な産地と比べ作業環境が良いとは言えません。このような中、当社は、イグサ植え付けの機械化に成功するなど、イグサ生産の作業環境を改善するため、さまざまな努力を行っております。また、本ヒアリングの中でも、当社が小松イグサの特長である強しなやかなイグサとするために、さまざまな工夫を行っていることが確認できました。この工夫は、当社にとっては、すでに当たり前のことになっているかもしれませんが、私にとってはこの当たりの創意工夫こそが、小松イグサの特長を支える知的資産そのものであると感じました。この小松イグサの特長を支える知的資産が、当代だけではなく次代を担う後継者にも引き継がれるとともに、お互いに切磋琢磨できる生産者にも引き継がれ、後世においても小松イグサが北限のイグサとして輝いていることを期待します。

### 行政書士 勝尾 太一

現在、「北限のイグサ」である小松イグサ、小松イグサを用いて作られる小松畳表は、今、大きな岐路にあります。

石川県小松市を中心に生産されてきた小松イグサは、雪国特有の生産方法(p4参照)がとられ、一般的なイグサ生産に比べ多くの手間と時間をかけて生産されております。堅く丈夫でありながら、しなやかさを兼ね備えた小松イグサを用いて作られる小松畳表は、原料として生産品としての魅力を持っております。

この魅力にあふれる小松イグサを生産する農家が国内ただ一軒となっている点は弱みとなっていることは否めません。しかしながら、イグサの生産・畳表の製造にける宮本氏の志は高く(人的資産)、この弱みを最大の強みに転換する可能性をもっております。

宮本氏は、長年この地域で行われてきた従来からの小松イグサの生育方法を知ると同時に、昭和50年代に行われた土壌改良以降の新たな生産の工夫、作業の機械化に取り組んできました(構造資産)。これらの生育の工夫や蓄積されたノウハウは、たいへん貴重な知的資産となっております。今後は、これらの知的資産を明確な記録、文書など形に残るものとして明らかにすることが重要となります。

小松イグサを用いた、畳表製造業者との連携や畳表以外の商品開発に本格的に取り組んでいる状況(関係資産)は、宮本氏にとって明るい材料となっております。

まずは、宮本氏自らが小松イグサとは何かを今一度確認し、定義づけることから始めることが、次の一歩に繋がると考えます。

### 弁理士 横井 敏弘

宮本隆史(以下、当社)は、小松市でイグサを栽培し、本格的に小松畳表を生産する唯一の存在です。小松のイグサは、他地域のものと比較して、その性質、栽培期間、及び栽培環境などの点で、特異なものとなっております。この特異性は、ブランド力を構築していく上で、非常に有用であり、小松イグサや小松畳表の可能性を大きくする源泉となりうるものです。小松イグサ及び小松畳表の特異性をよりわかりやすく伝えるために、特性の特定や数値化が有益であると考えます。また、原産地表示として強い保護も期待できます。

小松イグサを活用した商品の開発も、さまざまな協力者の協力を得て、着実に進んでおり、今後益々加速していくものと思われれます。農家を初め、加工業者や販売者などの人的ネットワーク(関係資産)をさらに広げて、小松イグサ及び小松畳表の魅力がさらに増していくことを期待しております。

## 8. 知的資産経営報告書とは

### 【意義】

「知的資産」とは、従来のバランスシートに記載されている資産以外の無形の資産であり、企業における競争力の源泉である人材、技術、技能、知的財産（特許・ブランドなど）、組織力、経営理念、顧客とネットワークなど、財務諸表には表れてこない、目に見えにくい経営資源、すなわち非財務情報を、債権者、株主、顧客、従業員といったステークホルダー（利害関係者）に対し、「知的資産」を活用した企業価値向上に向けた活動（価値創造戦略）として目に見える形で分かりやすく伝え、企業の将来に関する認識の共有化を図ることを目的に作成する書類です。経済産業省から平成17年10月に「知的資産経営の開示ガイドライン」が公表されており、本報告書は原則としてこれに準拠して作成いたしました。

### 知的資産のイメージ



### 【注意事項】

本知的資産経営報告書に掲載しております将来の経営戦略及び事業計画並びに附随する事業見込みなどは、すべて現在入手可能な情報をもとに、弊社の判断にて記載しております。そのため、将来に亘る弊社を取り巻く経営環境（内部環境及び外部環境）の変化によって、これらの記載する内容などを変更する必要を生じることもあり、その際には、本報告書の内容が将来実施又は実現する内容と異なる可能性もあります。よって、本報告書に記載した内容や数値などを、弊社が将来に亘って保証するものではないことを、充分にご了承願います。

尚、本知的資産経営報告書は、経済産業省中部経済産業局が所管する中小企業支援ネットワーク強化事業の一環として、その支援機関である石川県中小企業団体中央会のご支援により作成いたしました。